

那珂川アユ漁獲量調査（平成25年度）

誌名	栃木県水産試験場研究報告
ISSN	13408585
著者名	石川,孝典 高木,優也
発行元	栃木県水産試験場
巻/号	58号
巻号補足	
掲載ページ	p. 23-24
発行年月	2015年2月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター

Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



那珂川アユ漁獲量調査（平成25年度）

石川 孝典・高木 優也

目 的

那珂川は、平成24年度のアユの河川別漁獲量が全国2位のアユ資源の豊かな河川である。¹⁾ このアユ資源を持続的に活用するためには、漁獲の動向を把握した上で適正な漁場運営を行うことが必要である。そこで今年度も引き続き、那珂川におけるアユの漁獲状況について調査した。

材料および方法

友釣りによる漁獲状況 栃木県那珂川漁業協同組合連合会会員4漁協に対し、前年度の賦課金納入者数の割合に応じ調査票150枚を配布した。各漁協がそれぞれ選定した調査員に対し6月1日の釣り解禁から11月10日までの間、釣り行日の釣獲尾数（釣果なしも含む）の記録を依頼した。無記入の調査票は、出漁日数を0として扱った。回答率は77.3%であった。

投網による漁獲状況 釣りと同様の方法で調査票50枚を配布し、漁獲量の調査を行った（投網は7月10日から区間毎に順次解禁される）。回答率は66.0%であった。

釣獲魚の体重 各漁協の組合員各1名に対し、漁期中に釣り場所と釣獲したすべてのアユの体重、下顎側線孔による放流・天然魚の判別結果について記録を依頼した。釣獲魚は、地区（黒羽・湯津上、烏山および茂木）ごとに、月毎および旬毎の平均体重と放流魚の割合を求めた。

結果および考察

釣れ具合・獲れ具合 釣れ具合は5.7尾/人/日で、調査開始以来最低を記録した前年（5.1尾/人/日）の約1.1倍となり、平年（9.9尾/人/日、平成6年から24年までの平均）に比べると低水準であった（図1）。

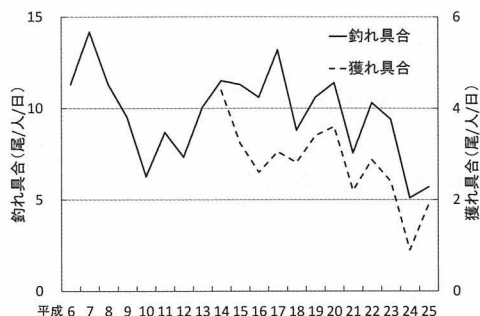


図1 釣れ具合および投網による獲れ具合の推移

月別でも漁期を通して平年の約6割の水準で推移した（図2）。この理由として、冷水病やエドワジエラ・イクタルリ感染症の発生が釣れ具合に悪影響を及ぼしたことが考えられた。

投網による獲れ具合は1.9kg/人/日で、前年の約2.1倍と大きく改善されたが、平年（2.6kg/人/日、平成14年から24年までの平均）の約70%で、平年より低水準ではあるが釣りよりも回復が顕著であった（図1）。

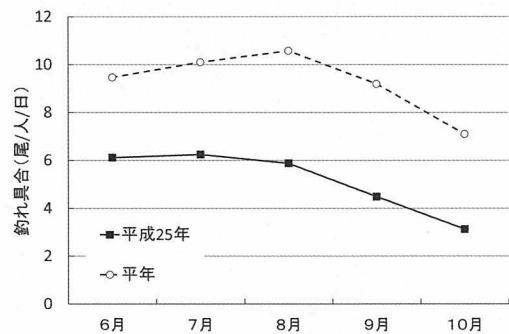


図2 釣れ具合の月別推移

釣獲尾数・漁獲重量 釣獲尾数は106万尾で前年の約1.3倍、平年（442万尾）の約25%で引き続き低水準であった（図3）。釣獲量は91.7tで、前年（70.2t）の約1.3倍、平年（217t）の約40%であった。投網による漁獲量は35tで、前年の約3.5倍、平年（平成14年以降、110t）の約30%と、低水準であるものの釣りの漁獲量よりも大きく回復した。

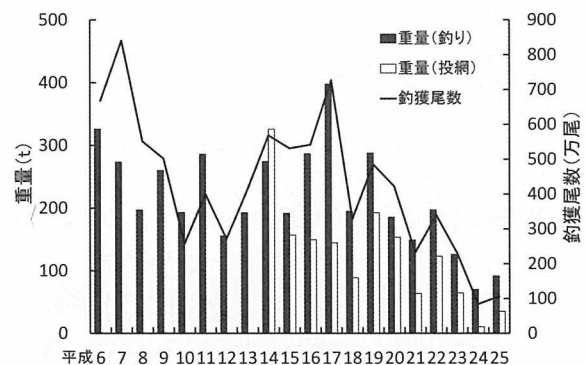


図3 釣獲尾数・重量および投網による漁獲重量の推移

釣獲魚の体重 釣獲魚の年間の平均体重は91gで、前年（84g）の約1.1倍、平年（55g）の約1.6倍となり、調査開始以来最大となった（図4）。解禁当初から平均

体重が大きい傾向が見られたが、7月以降は急激に成長し、8月以降は100gを越えた(図5)。これまでの調査から、釣獲魚の体重は遡上群数との間に負の相関関係が認められている。²⁾今年度は天然魚の遡上群数が多かったことから、何らかの原因で漁期途中に生息密度が低下し、餌料環境が向上したものと推察される。

釣獲魚の体重 釣獲魚の年間の平均体重は91gで、前年(84g)の約1.1倍、平年(55g)の約1.6倍となり、調査開始以来最大となった(図4)。解禁当初から平均体重が大きい傾向が見られたが、7月以降は急激に成長し、8月以降は100gを越えた(図5)。これまでの調査から、釣獲魚の体重は遡上群数との間に負の相関関係が認められている。²⁾今年度は天然魚の遡上群数が多かったことから、何らかの原因で漁期途中に生息密度が低下し、餌料環境が向上したものと推察される。

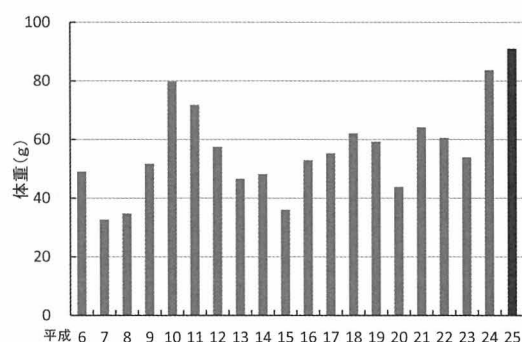


図4 釣獲魚の体重の経年推移

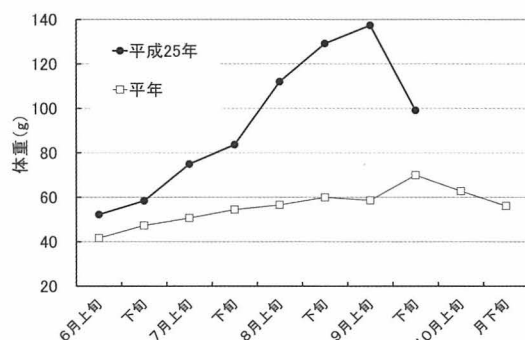


図5 月別の釣獲魚の体重の推移

釣獲魚に占める放流魚の割合 黒羽・湯津上地区では6月に65%を占め、平年よりもやや高くなった(図6a)。当地区での釣獲魚に占める放流魚の割合は、平年は7月以降20から30%程度と徐々に低くなるが、今年度は7月から9月にかけても50%以上で推移し、釣獲に対する放流魚の貢献度合いが高い傾向にあった。烏山地区においても、平年よりも放流魚の割合が約20%程度高く推移した(図6b)。

出漁者数 釣り出漁者数は19.5万人で前年(16.1万人)の約1.2倍、平年(43万人)の約45%にとどまった(図7)。投網出漁者数は1.8万人で前年(1.1万人)の約1.6倍、平年(平成14年以降、3.8万人)より2万人少なかった。これらの結果は、東日本大震災に伴う福島第1原子力発電所の事故による風評の影響に加え、引き続きアユの漁獲が漁期を通して低迷し続けた状況を反映したものと考えられる。

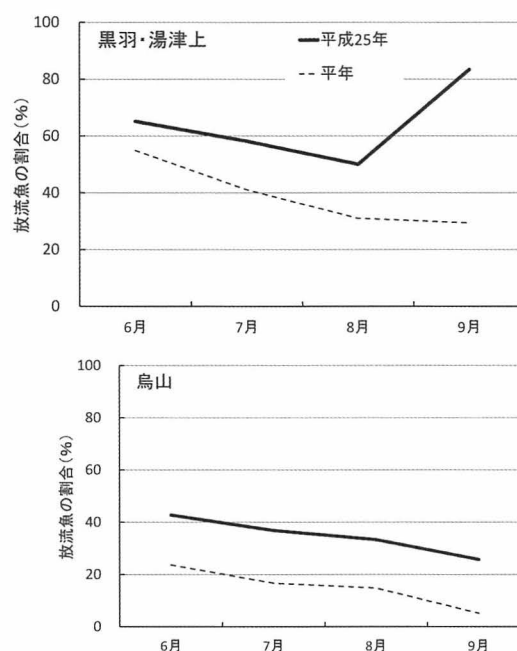


図6 地区および月別の釣獲魚に占める放流魚の割合

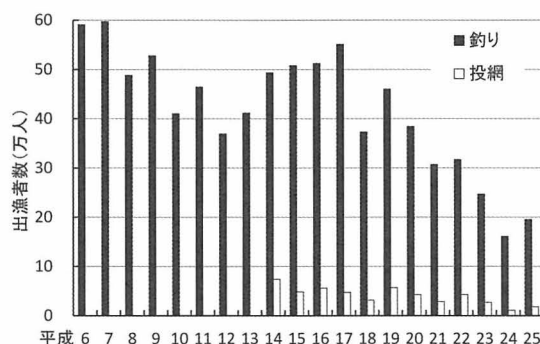


図7 出漁者数の経年推移

引用文献

- 1) 農林水産省 大臣官房統計部. 魚種別・河川別漁獲量.平成24年度漁業・養殖業生産統計年報2013.
- 2) 吉田豊. 栃木県那珂川におけるアユの生産力. 環境調和型アユ増殖手法開発事業報告書 2007; 72-82.

(指導環境室)

那珂川アユ漁獲量調査（p23-24）

平成25年度の那珂川のアユ漁獲状況を調査しました。平均釣れ具合は5.7尾/人/日と昨年に続き平年値（9.9）よりも低調でした。また、釣獲尾数106万尾、釣獲重量91.7t、釣り入漁者数19.5万人と、過去最低の昨年よりは回復したものの低水準でした。釣獲魚体重は91gで過去最大でした。投網は、平均獲れ具合1.9

kg/人/日，漁獲重量35t，入漁者数1.8万人で，回復傾向ではありますが釣りと同様に低水準でした。